戸部銀作氏に聞く

戸部　桑原経重さんが東京都の政治家で、文部省に入ったのですが、この人がいろいろな情報を知っていますから、文化財保護委員会が出来て、芸術課を作ったのです。芸術祭も今日出海課長の元で、全部桑原君がやったのです。でも芸術課だけでは十分ではない、今度文化財研究所を作るから僕にちょうどよいのではないか、と言われて推薦されたのが事実です。犬丸さんが中心になって、文化財研究所を作ったのです。

犬丸さんが事務的に全部仕切っていました。郷土芸能は慶応系で、池田弥三郎と三隅君が國學院だから折口信夫の系統。音楽は岸辺さんと横道さん。犬丸さんが近藤忠義さんに相談して、少々知りあいだったから非常勤で入ることになったのです。常勤は浦山さん。僕より年が五つか六つ上で、温厚な人でした。

高桑　お入りになるまでは、浦山先生とは面識はなかったのですね。

戸部　僕は近藤忠義さんに言われて、六人で始まりました。一番遅く入ったのが横道さんでしたが、すごく才能がありました。僕も横道君と付き合いがあったから、南博などと新しい会を作ったのですよ。

羽田　伝統芸術の会の前身ですね。

戸部　そこに横道君も来ていた。そういう進歩的な人間と交流があった。そんなことがあったのが昭和二十七年です。

高桑　その頃の非常勤は週一日ですか。仕事の内容としては浦山先生とどういうことをなさったのですか。

戸部　歌舞伎関係の文献を扱った。僕は舞踊を担当して、何をしようかと思ったのですが、全国に舞踊協会があるけれど、何をしているのかわからない。そこで、全国の舞踊家に手紙を出して演目を尋ねたり、「三番叟」はやっていますか、とか手紙を出して聞きました。

羽田　演目の所在を。

戸部　流儀の成立がはっきりしないから。小さな流儀に到るまで、日本中問い合わせて調べに行った。最初は舞踊部門で仕事をやりました。

高桑　伊豆の三番叟の調査は一緒にいらっしゃったのですか。

戸部　その頃は行かなかった。しかし三番叟は各流派でどういうふうに伝えているか、昭和二十年代の現状を調べるのに使ったのです。

児玉　週一日の勤めで、全国を回るのは出張扱いですか。

戸部　そうです。

高桑　踊りを始めようと思われたのは、戸部先生が自分でお考えになったからですか。特に誰かから言われたわけではないのですね。

戸部　芸能の分類を見て、踊りをやっておかないと困ると思ったからです。三隅さんが舞踊の基本資料を作って。

羽田　三隅さんは舞踊のことにも詳しいですね。

戸部　ちょうどいいから基本を作ったのですが、当時三十くらいありました。戦後十年立って全国に続々と舞踊家が出ているから、それを確かめに行ったのです。舞踊協会はまだよかったけれど、民謡舞踊が出来て古典の日本舞踊と区別が付かなくなった。でもそういうことに全然手を着けていないでしょ。そのうちみんなが集まって始まったのが『舞踊譜』。

高桑　『舞踊譜』を始めたら、毎日毎日『舞踊譜』ばかりだったとか。

戸部　そうです。

羽田　その時は週一回ですか。

戸部　毎日、来たり来なかったりしました。そのうち、文化財保護委員会の役員、国立劇場を作るべき担当の部署の人が、僕に相談に来ましたね。古典といってもどこまでが古典か、というわけです。これは大きなことで、いまだに問題です。

羽田　演目とか、演出とかですね。

戸部　池田さんがいい意見を言ってくれるし、三隅君も。浦山さんは余り言わないけれど、横道さんは一番発言していましたね。どこまでを古典とするか、あの時の議論は全部残っていますからね。最近他の人からも言っていただきますけれど、文化財研究所で我々が認めたことが、ずいぶん続きましたよ。

　最初にやらされたメインの仕事は、国立劇場を作ったことです。食うや食わずの時代に何を作るか、という世

論はありました。歓迎されていなかった時でしたが、文化庁は人間国宝を作りたいということで、専門委員会が月一回ありました。専門委員もその時いましたから、三宅周太郎さんたちと我々で、誰がよいかと丁々発止でやっていました。研究所の仕事として、国立劇場を作るとか、人間国宝を認定する基になるものを作ったと思う。あとは、無形の文化遺産をどんな方法で作るかということばかりでした。

国立劇場はずっと関わっていたから、調査部門は本当だったら芸能部がやっているはずでした。上演のための調査をしなくてはならなかったのだけど、それはどこでもやっていないでしょう。横道さんが反対して移管しなくなったのですが。

高桑　国立劇場を作るに当たっての資料作りはみなさんで。

戸部　僕は非常勤だから余りしなかった。

羽田　その時考えるのは六人一緒だったのですか。

戸部　そうです。そういった話し合いをずいぶんしました。古典の範囲を決めるなど、当時いいことをしたと思うのです。

羽田　どういう演目にするとか、演出、技法を使うとか、そういうことまで話し合ったのですね。

高桑　そうした蓄積が、現在の芸能部の資料に生きているのですね。今日はどうもありがとうございました。

（二〇〇二年八月十二日

於：東京文化財研究所芸能部）

聞き手：羽田　昶

高桑いづみ

児玉　竜一